

市長と語る タウンミーティング
テーマ「災害に強いまちづくり」

日 時 平成24年8月8日 午後7時～8時35分
会 場 武蔵野町内会集会所（武蔵野町内会）
天 気 晴れ

参加者 32人

主な意見等（◆・・・参加者 ☆・・・市長）

◆関東大震災の時、この辺りはどの位の震度だったのか。

☆震度5強程度ではなかったのか。この辺りは地盤が固いと言われている。地震が発生した時にテレビに各市町村の震度が表示されるが、本市は低い傾向にある。本庁と勤労福祉センターの間に震度計があり、本市の震度が、県、気象庁に通報されるようになっている。かつては陸軍の火工廠などがあったことから、地盤が固い地域であるということなのかもしれない。

昨年の3月11日の時、本市の震度は4.3で震度4の階級に入り、富士見市、三芳町は4.7で震度5弱の階級に入る。

◆昨年の震災時、停電が長く、寒くて困った。

☆本市では、約4万6千世帯中、約1万5百世帯が停電になった。特にマンションでは、水が出なくなり影響が大きかった。電気の系統により停電しない地域があった。当日、保育所では親に子供を迎えにきてもらったが、旧大井地域の保育所では停電をしたため、亀久保保育所に子供たちを集めて親が迎えにくるまで預かった。電車も停まったため、一番遅く迎えてに来た方は翌日の朝であった。現在、小中学校では、災害時等には子供たちを帰宅させずに親が迎えにくるまで預かり、場合によっては学校に泊まらせるようにしている。

◆耐震化に対する補助はあるのか。

☆建築課では無料の簡易診断を実施している。建築確認の時の図面を持ってきてもらえばできます。それで必要かどうか判断し、必要なら正確な耐震診断をしてもらいます。手法として、現在は家全体の耐震化を図ると費用がかかるので、主に生活している部屋のみを耐震化したり、外壁を利用して耐震化を図って費用を抑える方法などもあります。

◆昭和56年以後に建築された家なら大丈夫ということか。

☆昭和56年に法改正があったので、昭和57年以降の建築なら大丈夫ではないかと思います。

◆窓が大きい、柱が少ないなどの場所を補強すればよいのか。

☆専門家の判断が必要かと思います。揺れの周期により被害が違ってくる。また、家具による圧死も多い。

阪神淡路大震災では、救助された方の7割以上が近所の方によって救われた。まずは自助ですが、助かった人同士で他の人を助ける共助が大変重要になってくる。その近所の力によって差が出てくる。自主防災組織の強化が重要。最近、若い人が自治会へ加入しない傾向があるので、市としては、転入時などに、任意ではあるが、市では災害に強いまちづくりをしていることを説明し加入促進を図っている。

◆避難場所が西公民館なので、子供たちには、自分たちの生死はそこに行けばわかると伝えているがどうなのか。

☆災害が発生する時期が、平日か土日か、昼か夜か深夜か、冬か夏か、食事中かななどにより被害が違ってくる。例えば、冬の北風が吹いている夕食時であれば火災が多発します。しかし、消防車が来ても、水道管が破損すれば水は出ず、消火ができない。いざという時は、避難所に逃げるのではなく、身近なスーパーの駐車場や畑など身の安全を確保できる場所に逃げてほしい。人を救助する時も1人ではなく、避難した者同士で他の人を救助してほしい。市外や出先にいる時もまずは身の安全を確保してほしい。落ち着いてから避難所へ避難してほしい。このことを他の人にも伝えてほしい。避難場所も決まった所に行く必要はなく、例えば、本市は地形も入り組んでいるので他市町の方が避難してきてもよい。また、その逆もよい。

3日間分の食糧については、1日2食として市が1日、県が1日、各家庭に残っているものを持ち寄って1日分確保してほしい。避難所には全員が入れる訳ではないので、家が残っている家庭はその家を活用しながらの避難生活となる。

◆道路の耐震はどうなっているのか。

☆川崎橋、養老橋や福岡橋などの耐震は実施する予定だが、道路はしていない。

◆原発事故による放射線量について、ふじみ野市でも測定を実施したのか。

☆市内171箇所を対象に実施したが支障はなかった。しかし、あすなろ公園のインド産の表土は、放射能数値が高かったので、表土の入れ替えをしました。小学校などの雨どいなどの数値が若干高かったので除染して入れ替えた。これは、原発事故後に降った雨による影響かと思う。

◆災害が起きた時、ここは津波や液状化の心配はないが、火事や崩壊などによる怪我などが心配、どのように行動できるのか。弱い人への対応として、被災地では中高生が主動して年寄りを助けた。被災地の学校教育の中で中高生を訓練した所では、その中高生が老人達を多く助けた。若いリーダーなどが必要であるが、市としての考えは。

☆皆さんに意識を高めることが重要だと思っている。どう救助するかであるが、阪神淡路大震災ではバールが1本あれば人を救助できたケースが多くあったので、そのような知識を知って意識を高めてほしい。

また、平日の昼間の現役世代がいない時に災害が発生すれば、地元にいる中

高生がどう活躍できるかが重要なので、どう訓練するか教育委員会と相談したい。避難所では、食料の配給、トイレの問題などが発生するので、だれがリーダーとなるのが重要。また、どのように救助ができるのかについてもこれから検討していきたい。いざという時にはだれもが助けることができるようにしていきたい。

市町村長に対する防災研修があり、「釜石の奇跡」として群馬大学の片田先生の講演があり、子供たちへの災害への教育の重要性とそのことが犠牲者をほとんど出さない結果となったことなどの話があった。また、避難所ではだれがリーダーの役割を果たすのかなどの図上訓練や自主防災組織が非常に有効です。家具の転倒防止策も有効です。食料の備蓄については、各家庭が5kgのお米を用意し、それを絶やすことなく常に5kgを備蓄してもらえれば地域での食糧を賄えるので実践してほしい。また、大型店とは食料提供などの協定を結んでいる。今後心配なことは、荒川の水位が上がっている時に、東京湾に津波が来た場合、どの位の被害がでるかということ、国では今秋頃に新たな想定を出すとのことである。

◆この間の図上訓練では4m未満の道がほとんどでこの地域は道が狭く火災があったら逃げられない。また、消防車も通れない。

☆ぜひ図上訓練を地域でもしてもらい、どこで火災があったらどこに逃げるかのシミュレーションをしてほしい。現在、木造住宅の分布図を作成し、その密集地でどのように初期消火ができるのか、消火器を数十メートルおきに置くことや簡易消火栓を設置したり、東京都のように消防が使う消火栓にホースを直接つなげられるようにすることなどを検討したい。

◆避難所は西公民館になっているが、どの地域の人を対象なのか。

☆絶対ではないですが、上福岡4丁目、5丁目、6丁目と武蔵野地域の方です。

◆西公民館に避難者は入りきらないのではないかな。

☆災害時に1,113人の方が西公民館で避難生活をする想定している。しかし、その他にも西口サービスセンターホールなどの施設もある。また、霞ヶ丘団地などは耐震性があるのでその方たちが避難所に来るとは限らず、自宅で避難生活をする方もいる。障がいのある方については、目が不自由なら停電がわからない、耳が不自由なら避難指示の声も聞こえない、また、精神障がいの方などは一番通り慣れた作業所が安心するなど避難方法はケースバイケースとなる。消防庁の方の講演では、想定はいくらでも高く出来る。しかし、高くしても市は何もできない。重要なことは、子供でもお年寄りでも出来ることをすること。また、家族や地域で何かあった時はどうするかを日頃から話し合っておくこと。12月2日の防災訓練では、ただ歩くのではなく、危険を想定しながら避難してもらうことで地域の実情が見えてくるので、そのことを念頭にしながら実施してほしい。